

## 第Ⅲ部 意識調査データの分析



## 第8章 障害のある人の地域生活について

### -市民の意識調査から-

岡本 惇太

#### 1 はじめに

近年、障害のある人の人権保障運動や福祉施策の強い要求により、障害のある人が地域で自立した生活を送っていける制度・仕組みづくりが整備されてきている。障害のある人という、かつては病院や施設で生活し、人通りの多いところにはあまり出ていないという印象があったが、今では街や駅など、多くの人が行き交う場所でも目にするようになり、施設や病院にいるといったイメージは未だに強く残っているものの、少しずつではあるが、変わってきていると思われる。このように障害のある人が自立した生活を送っていける社会が望ましいという考え方は多くの人々に広まってきており、その自立を支える環境を整備した社会が求められてきている。ここでの自立生活とは、個人の自己決定権が尊重され、自分の生活を自らの意思で選択してゆけることを指す。そうした地域における自立生活の実現には地域住民の理解や地域生活移行に関わる人々の意識の醸成が重要になる。本章では障害のある人が地域で自立した生活を送ることについて、住民はどう考え、どのような属性の方に意識の偏りがあるのかを調べ、その偏っている理由が何かを推測していく。

#### 2 問題設定

##### 2.1 経済的要因と市民意識

障害のある人が地域で生活していくには、障害の程度に応じた支援機器の購入や、病気の治療に関わる医療費などの出費に困らない経済的基盤が必要であり、家族や家庭内の経済的な余裕がなければ、生活を支えていくことは難しいと考えられる。そこで、個人の経済的属性が障害のある人の地域生活に対する意識に影響を及ぼしているのではないかと思ひ、回答者自身の個人収入の属性を用いて、その影響について調べてみた。

##### 2.2 年代別の意識の傾向

“はじめに”でも述べたように、障害のある人の地域における自立生活を支えるには、周りの住民の協力や地域で支えていこうとする意識が必要である。そこで、年齢の属性を用

いて、どういった年齢層に意識の傾向が見られるのか、調べてみた。

### 3 使用変数

被説明変数：問 14a「障害のある人の生活は家族や親族が支えるべきだ」、問 14b「障害のある人は施設で生活するほうがよい」、問 14c「障害のある人が自立して生活していくことは難しい」、問 14d「障害のある人の生活は地域で支えるべきだ」

説明変数：個人収入、年齢層（20代～30代＝若年、40代～50代＝中年、60代～70代＝老年）

### 4 分析結果

#### 4.1 経済的要因と市民意識

まず、説明変数である個人収入と被説明変数問 14a、問 14b とのクロス表でカイ二乗検定を行った。個人収入と問 14a「障害のある人の生活は家族や親族が支えるべきだ」のクロス表では、表 1 のとおりで、個人収入と意識の間で、有意な差は見られなかった。

表 1 個人収入と問 14a のクロス表（単位：%）

		障害のある人の生活は家族や親族が支えるべきだ					
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	計（度数）
個人収入	0～150万	16.7	25.7	44.6	4.8	8.2	100.0 (269)
	150～250万	15.0	27.5	41.7	5.0	10.8	100.0 (120)
	250～450万	18.9	28.0	36.0	9.7	7.4	100.0 (175)
	450万以上	15.1	26.2	34.1	11.1	13.5	100.0 (126)
	計	16.7	26.7	40.0	7.2	9.4	100.0 (690)

$N=690$   $df=12$   $\chi^2=0.232$   $p=0.148$

個人収入と問 14b「障害のある人は施設で生活する方がよい」のクロス表では図表 2 のとおりで、「そう思わない」と回答する割合では個人所得が 450 万以上の人の 23%程度が回答し、他の所得層に比べて多いことから、所得が比較的高い層では、「障害のある人は施

設で生活する方がよい」という意見に否定的な意識を持っているということが窺える。

表 2 個人収入と問 14b のクロス表 (単位:%)

		障害のある人は施設で生活するほうがよい					
		そう思う	どちらかとい えばそう 思う	どちらと もいえな い	どちらか といえ ば そう思 わない	そう思わない	計 (度数)
個人収入	0~150 万	3.3	10.7	60.1	13.3	12.5	100.0 (271)
	150~250 万	6.6	16.5	52.1	11.6	13.2	100.0 (121)
	250~450 万	2.9	10.9	58.3	17.1	10.9	100.0 (175)
	450 万以上	1.6	13.5	46.0	15.9	23.0	100.0 (126)
計		3.5	12.3	55.7	14.4	14.1	100.0 (693)

N=693 df=12  $\chi^2=0.035$  p=0.179

#### 4.2 各年齢層の意識の傾向

次に、説明変数の年齢層と被説明変数問 14b,問 14c,問 14d とのクロス表でカイ二乗検定を行った。年齢層と問 14b「障害のある人は施設で生活する方がよい」のクロス表では、図表 3 のとおりで、老年の「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答割合が他の年齢層に比べて、高い結果が得られた。

表 3 年齢層と問 14b のクロス表 (単位:%)

		障害のある人は施設で生活するほうがよい					
		そう思う	どちらかとい えばそう 思う	どちらと もいえな い	どちらか といえ ば そう思 わない	そう思わない	計 (度数)
年齢層	若年	2.8	9.9	67.6	12.0	7.7	100.0 (142)
	中年	2.3	8.3	57.7	15.1	16.6	100.0 (265)
	老年	4.9	16.4	49.0	14.1	15.5	100.0 (304)
計		3.5	12.1	56.0	14.1	14.3	100.0 (711)

N=711 df=12  $\chi^2=0.002$  p=0.184

年齢層と問 14c「障害のある人が自立して生活していくことは難しい」のクロス表では、老年の「そう思う」「そう思わない」の回答の割合が他の年齢層に比べて多く、若年層の「どちらかといえばそう思わない」の回答割合が他の年齢層に比べ高い結果が得られた。

表 4 年齢層と問 14c のクロス表 (単位:%)

障害のある人が自立して生活していくことは難しい						
	そう思う	どちらかとい えばそう 思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思 わない	そう思わない	計 (度数)
年齢層	若年	10.6	27.5	37.3	19.7	4.9 100.0 (142)
	中年	15.0	36.8	33.5	8.6	6.0 100.0 (266)
	老年	21.7	39.8	26.0	8.6	3.9 100.0 (304)
計	17.0	36.2	31.0	10.8	4.9	100.0 (712)

$N=712$   $df=8$   $\chi^2=0.000$   $p=0.209$

年齢層と問 14d「障害のある人の生活は地域で支えるべきだ」のクロス表では、年齢層と意識の間で有意な差は見られなかった。

表 5 年齢層と問 14d のクロス表 (単位:%)

障害のある人の生活は地域で支えるべきだ						
	そう思う	どちらかとい えばそう 思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思 わない	そう思わない	計 (度数)
年齢層	若年	26.1	40.1	29.6	2.8	1.4 100.0 (142)
	中年	23.4	38.5	31.7	4.9	1.5 100.0 (265)
	老年	17.7	34.4	39.0	5.2	3.6 100.0 (305)
計	21.5	37.1	34.4	4.6	2.4	100.0 (712)

$N=712$   $df=8$   $\chi^2=0.113$   $p=0.135$

## 5 考察

### 5.1 経済的要因と市民意識

分析結果から、まず図表 1 の個人収入と問 14a「障害のある人の生活は家族や親族で支えるべきだ」の意見に関する意識には有意な関連が見られず、障害のある人は家族や親族で支えるべきという意識は所得に大きな影響を及ぼされていないことが分かった。

次に図表 2 の個人収入と問 14b「障害のある人は施設で生活する方がよい」の意見に関する意識では所得の高い層が問 14b の意見に対して否定的な意識を持っていることが特徴として表れている。その理由としては、所得が高いということは、経済的に豊かであることから、もし、自分の家族が障害を持ったとしても、施設ではなく、在宅で生活を支えることができるため、施設で生活するという意見に否定的な考えを持たれたのではないかと考えられる。だが、この問 14b の質問文はもしあなたの家族が障害を持たれた場合を前提とはしておらず、一般的な意見に対する意識を問うているものであるため、上述した理由が成立するかどうかは確実には言えない。そうしたことから経済的要因が市民の障害のある人の地域生活に対する意識に関係はしている可能性はあるものの、それがどの程度関係しているのかは測ることができなかった。

### 5.2 各年齢層の意識の傾向

各年齢層の意識の傾向では、老年層の方が、問 14b「障害のある人は施設で生活する方がよい」、問 14c「障害のある人が自立して生活していくのは難しい」の意見で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答割合が他の年齢層に比べ多い傾向が見られた。そうした傾向の理由として、まず老年層の障害のある人に対するイメージが関係しているのではないかと思う。老年層である 60 代～70 代の人達は、戦後に発展してきた障害者関連の法制度の変遷とともに生きてきた世代であり、障害のある人が一般社会から排除され、特定の施設・場所に隔離されていた時代を実際に経験していることから、そうした障害のある人は施設中心の生活をし、福祉や政策の保護の対象であるという考えを持つ人がいるのではないかと考えられる。

また高齢になると、身体的な制約が大きくなり、認知症や病気に罹患しやすくなることから、高齢になるまでの生活を送ることが難しくなる。そうした高齢者の状況を障害のある人の状況に重ねることで、自立生活は難しいのではないかと考えることも理由のひとつとして考えられる。

一方で、若年層と「障害のある人が自立して生活していくのは難しい」の意見に関する意識においては、否定的な回答割合が他の世代に比べて多い特徴が見られた。その理由として大きく分けて2つ考えられる。まず1つめは1981年の国際障害者年と「国連・障害者の10年」を契機とする、日本障害者福祉施策の転換が挙げられる。これにより、従来の施設入所を中心とした施策から在宅福祉や社会参加の促進を目指す施策へと移行する取り組みが行われ、日本の国民にもこうした社会の動きと新たな障害観について考える機会が多くなったのではないかと推測される。

2つめは、2007年の「障害者権利条約」の署名と新たな障害観に関する考え方の広がりである。「障害者権利条約」には障害のある人の自立生活と地域社会への包容に関する規定が盛り込まれており、この権利条約署名以降、日本では障害に関する法制度が以前より、整備されるようになった。またノーマライゼーションや社会的包摂といった考え方が日本に浸透し、教育機関や職場でもこの概念の理解を進み、教育現場では、特別支援学級の発展とインクルーシブ教育の導入がされ、障害のある子どもが一般学級に入り、共に学び、社会に参加する環境が作られている。20代～30代の若年層はこうした障害者の人権保障や自立促進の考えが広まってきた社会の中で生まれ、学生時代を過ごしているため、そうした意識の特徴が見られるのではないかと思われる。

## 6 結論

今回の調査で、市民の障害のある方の地域生活に対する意識は個人の経済的要因の影響を受けている可能性があり、年齢によって意識に偏りがあることが分かった。またその年齢による意識の偏りから、現代社会の障害に対する考えや概念が個人の意識に影響及ぼしている、またかつての障害に対するイメージが老年層の人に残っていることを推測することができる。このことから、今後も障害のある人の地域生活への移行や自立促進を支える社会が望ましいという考えを広げていくことは、人々の障害のある人が平等な選択の機会を有し、地域生活を行うことができる社会にしていこうとする意識の深化に一定の効果をもつと言えるだろう。

## 参考文献

菊池馨美・中川純・川島聡, 2015, 『障害法』成文堂.

岩田正美・杉野昭博, 2011, 『障害と福祉』日本図書センター.

## 第9章 障害のある人となない人の障害観 —障害の有無と幸福の関係をどのようにみているのか—

渡辺 健太郎

### 1 はじめに

障害をもたない市民と、障害の当事者は、それぞれ障害をどのように考えているのだろうか。本稿はこうした問いから出発する。

市民がどのような障害観をもっており、障害当事者がどのような障害観をもっているのかを明らかにすることは、障害当事者の福祉を充実させていくためにも必要なプロセスであると考えられる。なぜなら、障害をもたない市民の障害観のみにもとづいて様々な政策的決定がなされることは、障害をもつ当事者の障害観を反映していないことになるといえるからだ。市民と障害の当事者、どちらの障害観も明らかにすることで、政策的決定を為していく際に、その決定がどちらかの障害観に偏ってはいないかということを考えることができる。市民と障害当事者、それぞれの障害観を明らかにすることは、こうした重要さをもつ。

そこで本稿では市民と障害当事者それぞれの障害観を明らかにする。具体的には、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という、幸福についての障害観に着目して分析を進めていく。

### 2 回答分布

#### 2.1 障害当事者の回答分布

まず、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問に対する、精神障害当事者、知的障害当事者、身体障害当事者、市民、それぞれの回答の分布を確認する。回答選択肢は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の5段階になっている。

また、今回の調査結果は、障害当事者と市民でサンプリングの手法が異なるために単純な比較はできないという点には留意が必要である。

まず、精神障害当事者の回答の分布を確認する（表1）。「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問にたいして、精神障害当事者の約4割が、「そう思う」と回答を

している。また、「どちらかといえばそう思う」と回答した精神障害当事者は 1 割ほどである。

精神障害当事者のうち、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問にたいして、肯定的な回答（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」）をした割合は、約 5 割であった。また、否定的な回答（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」）をした割合は約 3 割であった。

過半数の精神障害当事者が肯定的な回答していることは、他の障害当事者と比較したとき、精神障害当事者だけにあてはまる回答の特徴なのだろうか。そこで、表 2 を確認してみよう。

表 1 精神障害当事者の「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」への回答

	度数	%
そう思う	50	40.0
どちらかといえばそう思う	16	12.8
どちらともいえない	22	17.6
どちらかといえばそう思わない	9	7.2
そう思わない	28	22.4
合計（有効ケース）	125	100.0

表 2 知的障害当事者の「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」への回答

	度数	%
そう思う	51	39.2
どちらかといえばそう思う	22	16.9
どちらともいえない	33	25.4
どちらかといえばそう思わない	3	2.3
そう思わない	21	16.2
合計（有効ケース）	130	100.0

表 2 は、知的障害当事者の回答分布を示している。知的障害当事者において、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問にたいして、肯定的な回答（「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」）をした割合は、約 6 割である。否定的な回答（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」）をした割合は、約 2 割にとどまった。知的障害当事者においても、精神障害当事者と同様、過半数が肯定的な回答をしている。

次に、身体障害当事者の回答分布を確認してみよう（表 3）。表 3 を確認すると、身体障害当事者の約 6 割が「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問にたいして、肯定的な回答（「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」）をしている。

表 3 身体障害当事者の「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」への回答

	度数	%
そう思う	183	42.3
どちらかといえばそう思う	78	18.0
どちらともいえない	91	21.0
どちらかといえばそう思わない	34	7.9
そう思わない	47	10.9
合計（有効ケース）	433	100.0

ここまで、精神障害当事者と知的障害当事者、身体障害当事者の回答分布を確認した。これら 3 つの回答分布からは、白山市における障害当事者の過半数が、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問にたいして、肯定的な回答（「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」）をしているということがわかる。上述したように単純な比較はできないが、白山市における障害当事者の過半数は、幸福と障害の間に関係はないという障害観をもっているようである。

## 2.2 市民の回答分布

ここまで、障害当事者の回答分布を確認した。以下では市民の回答分布を確認し、市民は幸福についてどのような障害観をもっているのかを見ていきたい。表 4 は、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問に対する市民の回答の分布を示す。この質問に対して肯定的な回答（「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」）をしている市民は

約 5 割であった。

表 4 市民の「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」への回答

	度数	%
そう思う	189	26.6
どちらかといえばそう思う	167	23.5
どちらともいえない	194	27.3
どちらかといえばそう思わない	94	13.2
そう思わない	67	9.4
合計（有効ケース）	711	100.0

障害当事者と市民の間で、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問に対する回答分布の比較から、障害当事者と市民のどちらの過半数も、幸福と障害の間に関係はないという障害観をもっているようだ。

しかし、障害当事者と市民の過半数が障害と幸福の間に関係を見出していないからといって、そこに問題がないわけではない。そもそも、上述したように単純な比較はできないし、また、過半数が幸福と障害の間に関係はないと考えている一方で、幸福と障害の間には関係があると考えている人たちもいるからだ。「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」という質問に対して、精神障害当事者で否定的な回答（「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」）をしたのは約 3 割、知的障害当事者では約 2 割、身体障害当事者でも約 2 割、市民でも約 2 割だ。

こうした回答の分布を確認すると、それぞれの障害当事者と市民において、幸福と障害の間に関係を見出す人たちがいることがわかる。こうした障害観をもつ人たちはどのような人たちなのだろうか。幸福と障害の間に関係を見出さなければいけない状況は、障害当事者についていえば、障害当事者の福祉が実現できていないという状況をあらわすとも考えられる。障害当事者の福祉という点からも、幸福と障害の間に関係を見出すのは、どのような人々であるのかを問わなければならないだろう。

### 3 クロス表分析

#### 3.1 使用変数

幸福と障害の間に関係があるとする障害観をもつのはどのような人たちなのだろうか。という問いに対し、「性別」という視点から考察を進めていく。

具体的な分析の進め方としては、「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」を被説明変数に、「性別」を説明変数に用いたクロス表分析を行う。まず、使用変数についての確認をしておく。「性別」は、男性か女性かをあらわす 2 値変数である。回答選択肢は、「1.男性」、「2.女性」となっている。

「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」は、幸福と障害の間の関係をどのように考えているかという障害観をあらわす。回答選択肢は「1.そう思う」、「2.どちらかといえばそう思う」「3.どちらともいえない」、「4.どちらかといえばそう思わない」、「5.そう思わない」の 5 段階になっている。

本稿でのクロス表分析において、「1.そう思う」と「2.どちらかといえばそう思う」は「1.そう思う」にリコード、「3.どちらともいえない」は「2.どちらともいえないにリコード、「4.どちらかといえばそう思わない」と「5.そう思わない」は「3.そう思わない」にリコードした。

#### 3.2 クロス表

表 5 は、精神障害当事者の性別と幸福についての障害観のクロス表である。クロス表分析の結果から、精神障害当事者において、「性別」と「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」には、10%水準での有意な関連は見られなかった。

表 5 精神障害当事者の性別と幸福についての障害観のクロス表（単位：%）

	人の幸せと障害の有無は関係ないと思う			計（度数）
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
男性	45.7	22.9	31.4	100.0 (70)
女性	61.8	10.9	27.3	100.0 (55)
計	52.8	17.6	29.6	100.0 (125)

$N=125$   $df=3$   $\chi^2=4.191$   $p=0.123$

表 6 は、知的障害当事者の性別と幸福についての障害観のクロス表である。このクロス表からは、知的障害当事者において、「性別」と「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」には、5%水準で有意な関連があるということがわかる。傾向としては、女性であるほど人の幸せと障害の有無は関係がないと考えるようだ。逆に、男性であるほど人の幸せと障害の有無は関係があると考えるようだ。

表 6 知的障害当事者の性別と幸福についての障害観のクロス表（単位：%）

	人の幸せと障害の有無は関係ないと思う			計（度数）
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
男性	50.0	35.0	15.0	100.0 (60)
女性	62.3	15.9	21.7	100.0 (69)
計	56.6	24.8	18.6	100.0 (129)

N=129 df=3  $\chi^2=6.343$  p=0.042

表 7 は、身体障害当事者の性別と幸福についての障害観のクロス表である。このクロス表からは、身体障害当事者において、「性別」と「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」には、1%水準で有意な関連があるということがわかる。知的障害当事者と同様、女性であるほど人の幸せと障害の有無は関係がないと考えるようだ。また、男性であるほど人の幸せと障害の有無は関係があると考えるようだ。

表 7 身体障害当事者の性別と幸福についての障害観のクロス表（単位：%）

	人の幸せと障害の有無は関係ないと思う			計（度数）
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
男性	57.9	16.7	25.3	100.0 (221)
女性	62.7	25.5	11.8	100.0 (212)
計	60.3	21.0	18.7	100.0 (433)

N=433 df=3  $\chi^2=14.955$  p=0.001

表 8 は、市民の性別と幸福についての障害観のクロス表である。このクロス表からは、

市民において、「性別」と「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」には、1%水準で有意な関連があるということがわかる。知的障害当事者や身体障害当事者と同様に、女性であるほど人の幸せと障害の有無は関係がないと考え、男性であるほど人の幸せと障害の有無は関係があると考えようだ。

表 8 市民の性別と幸福についての障害観のクロス表（単位：%）

	人の幸せと障害の有無は関係ないと思う			計（度数）
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
男性	42.9	27.2	29.9	100.0 (294)
女性	55.2	27.3	17.5	100.0 (417)
計	50.1	27.3	22.6	100.0 (711)

$N=711$   $df=3$   $\chi^2=16.968$   $p=0.000$

分析結果をまとめておく。「性別」と「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」のクロス表分析を行った結果、知的障害当事者、身体障害当事者、市民については、「性別」と「人の幸せと障害の有無は関係ないと思う」の間に有意な関連が見られた。また、女性であるほど人の幸せと障害は無関係だと考え、男性であるほど人の幸せと障害は関係があると考えられる傾向は、知的障害当事者、身体障害当事者、市民に共通していた。

## 6 考察

知的障害当事者、身体障害当事者、市民について、男性であるほど人の幸せと障害は関係があると考えるのはなぜだろうか。そうした疑問に対する答えの一つとして、性別役割分業意識が考えられるのではないだろうか。

東京都の都区部に住む 25 歳から 49 歳の男性 3000 人を対象とした「都市男性の生活と意識に関する調査」（岡本 2012）では、『『経済的に自立している』を『とても重要』と答えたのは 80.5%、『やや重要』は 18.5%であり、99.0%が男性の自立にとって経済的自立を重視している』（大槻奈巳 2005：139）。

性別役割分業意識において、男性にとって経済的な自立が重要だと考えられているのであれば、就労ができていない状態は幸福ではないと考えられるのではないだろうか。また、男性については就労に幸福が影響されると考えるのならば、障害によって就労が困難にな

った場合、幸福を追求することも困難になると考えられるのではないか。就労によって稼ぎを得て、「一人前」にならなければならないという性別役割規範意識は、裏を返せば、就労によって稼ぎを得ていなければ「一人前」ではないということを意味する。男性にとっては、こうした性別役割分業意識において「一人前」ではないとされる状況、すなわち「就労」によって稼ぎを得ることのできない状況が、幸福ではないと考えられているのではないだろうか。

## 7 おわりに

本稿では、障害当事者と市民はそれぞれどのような障害観を持っているのかという問いから出発し、幸福についてのそれぞれ障害観をみた。そして、その障害観は性別によってどのように異なるのかを分析した。その結果、知的障害当事者、身体障害当事者、市民について、男性であるほど、障害と幸福の間に関連を見出す傾向にあることがわかった。

障害の有無によって、個人の幸福がまったく左右されることのない福祉制度の実現というのは、難しいのかもしれない。しかし、たとえば障害当事者の就労のあり方などの、福祉制度の充実によって、障害の有無が個人の幸福に対してもつ影響を減らすことができる部分もあるのではないだろうか。

## 参考文献

- 大槻奈巳, 2012, 雇用不安定化のなかの男性の稼ぎ手役割意識, 134-153, 目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編, 『揺らぐ男性のジェンダー意識 仕事・家族・介護』新曜社.
- 岡本英雄, 2012, 調査の概要, viii, 目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編, 『揺らぐ男性のジェンダー意識 仕事・家族・介護』新曜社.

## 第10章 障害のある人となない人との関わり

窪内 綾

### 1 はじめに

近年、障害のある人が年々増えてきている。このような社会ではますます、健常者と障害のある人が関わり合いながら生きていくことを余儀なくされるだろう。そこで、両者がうまく付き合えるのかどうか、差別意識調査の結果から分析していきたいと思う。

ここでは、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」「障害のある人と一緒に仕事をして、十分うまくやっているとと思うか」「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいと思うか」「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方であるか」「自分が障害のある子どもの親になっても十分うまくやっているとと思うか」の5つの質問項目と、回答者の性別、年齢、最終学歴、収入、障害のある方との関わりの有無、障害のある人のためのボランティアの経験の有無、障害に関する授業や講演を受けたことがあるかをそれぞれクロス集計した。

### 2 障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思う人

「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」という質問をしたところ、表1のような結果であった。

表1 ボランティア参加希望

	度数	%
そう思う/どちらかといえばそう思う	231	32.8
どちらともいえない	305	43.3
そう思わない/どちらかといえばそう思わない	168	23.9
合計(有効ケース)	704	100.0

「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答した人の方が「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答した人よりも若干多いが、両者にはあまり大差はない。

では、どのような人が「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答しているのだろうか

か。私の予想では、障害のある人と関わったことがある人、障害に関する講演を受けたことがある人、学歴の高い人がそう回答する傾向にあると思う。

表 2 では、「身体障害者の方と関わったことがあるか」と「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」をクロス集計した。「精神障害者の方と関わったことがあるか」と「知的障害者の方と関わったことがあるか」という質問項目でもクロス集計したが、同じような結果であったため、「ある」と回答した人が三項目の中でもっとも多かった。身体障害者との関わりの有無とのクロス集計表をここにあげる。表 2 によると、身体障害のある方と関わりのある人の方が、障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思っている傾向にあるとわかる。

表 2 知的障害をもつ人との関わりとボランティア参加希望のクロス集計表

	障害のある人のためのボランティア活動に参加したい			計 (度数)
	そう思う <sup>1</sup>	どちらともいえない	そう思わない <sup>2</sup>	
あり	48.6	37.7	13.7	100.0 (120)
なし	27.0	45.5	27.4	100.0 (175)
計	32.7	43.5	23.8	100.0 (690)

表 3 では、「障害に関する授業や講演を受けたことがあるか」と「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」をクロス集計した。「ある」と回答した人は全体の 3 割にも満たないが、この表からも、障害に関する授業や講演を受けたことがある人の方が障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思っている傾向にあることが読み取れる。

<sup>1</sup> 「そう思う」には、「そう思う」という回答と「どちらかとえばそう思う」という回答が統合されている。こうした統合を行ったのは、クロス集計表におけるセルの数が多くなりすぎること、変数間の関連の傾向が読み取りにくくなるのを防ぐためである。こうした統合は、本稿における他のクロス集計表についても同様であるため、それぞれのクロス集計表について、回答の統合を行った記載は省略する。

<sup>2</sup> 「そう思わない」には、「そう思わない」という回答と「どちらかとえばそう思わない」という回答が統合されている。本稿における他のクロス集計表においても、同様の統合が行われているが、それぞれのクロス集計表での、回答の統合についての記載は省略する。

表3 講演受講経験とボランティア参加希望のクロス集計表

	障害のある人のためのボランティア活動に参加したい			計 (度数)
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
あり	48.2	33.5	18.3	100.0 (164)
なし	28.1	46.2	25.7	100.0 (537)
計	32.8	43.2	24.0	100.0 (701)

表4では、回答者の最終学歴と「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」をクロス集計した。強い関連は見られないが、最終学歴が高い方が障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思う傾向にあるといえる。

表4 最終学歴とボランティア参加希望のクロス集計表

	障害のある人のためのボランティア活動に参加したい			計 (度数)
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
中学校卒	21.7	53.6	24.6	100.0 (69)
高等学校卒	30.8	45.8	23.4	100.0 (325)
専門学校卒	42.0	34.6	23.5	100.0 (164)
大学卒	32.6	42.6	24.8	100.0 (537)
計	32.9	43.3	23.8	100.0 (701)

以上の3項目の他に、回答者の性別、年齢、収入、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがあるか」と「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」をそれぞれクロス集計したが、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思うか」と相関しているといえるものは、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがあるか」の項目だけであった。その結果は表5である。

表5 ボランティア経験とボランティア参加希望のクロス集計表

障害のある人のためのボランティア活動に参加したい				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	71.0	24.2	4.8	100.0 (62)
なし	29.0	45.1	25.9	100.0 (632)
計	32.7	43.2	24.1	100.0 (694)

以上より、障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思っている人は、障害のある方と関わりのある人、障害に関する授業や講演を受けたことがある人、最終学歴が高めな人、障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがある人だといえるだろう。しかし、これらの表を見る限り、これの逆は当てはまらない。身体障害のある方と関わりのない人、障害に関する授業や講演を受けたことがない人、最終学歴が低い人、障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがない人が、障害のある人のためのボランティア活動に参加したいと思っていないとはいえない。

### 3 障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思う人

「障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか」という質問では、表6のような回答を得られた。

表6 障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか

	度数	%
そう思う/どちらかといえばそう思う	264	37.3
どちらともいえない	351	49.6
そう思わない/どちらかといえばそう思わない	93	13.1
合計(有効ケース)	708	100.0

約半数の人が「どちらともいえない」と回答している。では、どのような人が「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答しているのだろうか。私の予想では、障害者に関わりのある人、障害のある人のためのボランティア活動に参加したことのある人が、障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思っている傾向にあると思う。

表 7 では、「身体障害者の方と関わったことがあるか」と「障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか」をクロス集計した。これも先ほど同じで、精神障害者、知的障害者との関わりの有無ともクロス集計したが結果がほぼ同じであったため、割愛する。表 7 によると、障害者との関わりの有無に関わらず、半数の人が「どちらともいえない」と回答している。しかし、障害者と関わりのある人の方が障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思っているようだ。

表 7 身体障害をもつ人との関わりと障害のある人との仕事をうまくやっていけると思うかのクロス集計表

障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	46.7	47.8	5.4	100.0 (184)
なし	33.7	50.6	15.7	100.0 (516)
計	37.1	49.9	13.0	100.0 (700)

表 8 では、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがあるか」と「障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか」をクロス集計した。表 8 によると、ボランティア経験のある人の 6 割が、障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思っていることがわかる。

表 8 ボランティア経験と障害のある人との仕事をうまくやっていけると思うかのクロス集計表

障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	60.3	28.6	11.1	100.0 (63)
なし	35.0	51.7	13.4	100.0 (635)
計	37.2	49.6	13.2	100.0 (698)

また、表 9 では「障害に関する授業や講演を受けたことがあるか」とクロス集計した。

これを見ると、障害に関する授業や講演を受けたことのある人の方が、障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっているとと思っているようである。

**表 9 講演受講経験と障害のある人との仕事をうまくやっているとと思うかのクロス集計表**

障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっているとと思うか				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	48.8	39.8	11.4	100.0 (166)
なし	33.6	52.7	13.7	100.0 (539)
計	37.2	49.6	13.2	100.0 (705)

表 10 では、回答者の最終学歴と「障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっているとと思うか」をクロス集計した。表 10 によると、最終学歴が高くなるほど、「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答した人の割合が増え、「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答した人の割合が減っている。

**表 10 最終学歴と障害のある人との仕事をうまくやっているとと思うかのクロス集計表**

障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっているとと思うか				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
中学校卒	39.1	37.7	23.2	100.0 (69)
高等学校卒	32.9	53.5	13.5	100.0 (325)
専門学校卒	38.2	49.7	12.1	100.0 (165)
大学卒	45.8	45.1	9.2	100.0 (142)
計	37.4	49.4	13.3	100.0 (701)

これら以外に、回答者の性別、年齢、収入と「障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっているとと思うか」をそれぞれクロス集計したが、あまり強い相関は見られなかった。表 11 は、回答者の年齢と「障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっているとと思うか」のクロス集計表である。40代・50代の人の方が、20代・30代と60代・70代と比べると若干、「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答し

た人の割合が少なく、「どちらともいえない」と回答した人の割合が多い。

表 11 年齢と障害のある人との仕事をうまくやっていけると思うかのクロス集計表

障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思うか				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
20代・30代	38.7	47.9	13.4	100.0 (142)
40代・50代	36.2	55.1	8.3	100.0 (265)
60代・70代	38.0	45.1	16.8	100.0 (297)
計	37.4	49.6	12.9	100.0 (704)

以上より、障害のある人と一緒に仕事をしても、十分うまくやっていけると思っている人は、障害者の方と関わったことのある人、障害のある人のためのボランティア経験のある人、障害に関する授業や講演を受けたことのある人、最終学歴が高い人、40代・50代の人だといえるだろう。

#### 4 障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいと思う人

「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいか」という質問では、表 12 のような回答を得られた。約半数の人が「どちらともいえない」と回答しており、約 3 割が「そう思う/どちらかといえばそう思う」、約 2 割が「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答している。私の予想では、障害のある方と関わったことのある人、障害に関する授業や講演を受けたことのある人が「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答しているのではないかと思う。

表 12 障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたい

	度数	%
そう思う/どちらかといえばそう思う	235	33.4
どちらともいえない	336	47.7
そう思わない/どちらかといえばそう思わない	133	18.9
合計(有効ケース)	704	100.0

表 13 では、「身体障害者の方と関わったことがあるか」と「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいか」をクロス集計した。精神障害の方、知的障害の方との関わりの有無とのクロス集計もほぼ同じ結果であった。この表によると、障害のある方と関わったことのある人の方が「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答している。

表 13 身体障害をもつ人との関わりと交流希望のクロス集計表

障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたい				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	45.9	43.1	11.0	100.0 (181)
なし	28.5	49.5	21.9	100.0 (515)
計	33.0	47.8	19.1	100.0 (696)

表 14 は「障害に関する授業や講演を受けたことがあるか」と「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいか」をクロス集計したものである。この表は明らかに、障害に関する授業や講演を受けたことがある人の方が、障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいと思っているといえる。障害に関する授業や講演を受けたことがない人の半数は「どちらともいえない」と回答しており、「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答した人よりも「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答した人の方が多い。

表 14 講演受講経験と交流希望のクロス集計表

障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたい				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	49.4	36.6	14.0	100.0 (164)
なし	18.3	51.2	20.5	100.0 (537)
計	33.2	47.8	19.0	100.0 (701)

表 15 では、回答者の性別と「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流

をしたいか」をクロス集計した。これによると、男性よりも女性の方が、障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいと思っているようだ。

表 15 性別と交流希望のクロス集計表

障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたい				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
男性	29.4	47.8	22.9	100.0 (293)
女性	36.3	47.7	16.1	100.0 (411)
計	33.4	47.7	18.9	100.0 (704)

表 16 では、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがあるか」と「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいか」をクロス集計した。ボランティアの経験のある人の約 6 割は、障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいと思っているようだ。

表 16 ボランティア参加経験と交流希望のクロス集計表

障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたい				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	66.1	32.3	1.6	100.0 (62)
なし	30.1	49.5	20.4	100.0 (632)
計	33.3	48.0	18.7	100.0 (694)

表 17 では、回答者の最終学歴と「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいか」をクロス集計した。これによると、学歴の高い人の方が「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答しているようである。

表 17 最終学歴と交流希望のクロス集計表

障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたい				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
中学校卒	25.0	55.9	19.1	100.0 (68)
高等学校卒	30.0	49.5	20.4	100.0 (323)
専門学校卒	43.3	44.5	12.2	100.0 (164)
大学卒	33.1	44.4	22.5	100.0 (142)
計	33.3	47.9	18.8	100.0 (697)

上記以外にも回答者の年齢，収入と「障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいか」をそれぞれクロス集計したが，あまり相関は見られなかった。

以上より，障害のある人と地域の行事や趣味のサークルなどで交流をしたいと思っている人は，障害のある方と関わったことのある人，障害に関する授業や講演を受けたことがある人，障害のある人のためのボランティアの経験のある人，学歴の高い人，女性であることがわかる。

## 5 障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方である人

「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か」という質問をしたところ，表 18 のような回答結果であった。「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答した人の方が「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答した人よりも少し多いが，大差はない。私は，障害のある方と関わったことのある人，障害のある人のためのボランティア活動に参加したことのある人，障害に関する授業や講演を受けたことのある人は，障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方であるのだと予想する。

表 18 障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か

	度数	%
そう思う/どちらかといえばそう思う	247	34.7
どちらともいえない	297	41.8
そう思わない/どちらかといえばそう思わない	167	23.5
合計(有効ケース)	711	100.0

表 19 は、「身体障害者の方と関わったことがあるか」と「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か」をクロス集計したものである。精神障害のある方、知的障害のある方との関わりの有無とのクロス集計結果もほぼ同様であったため割愛する。表 19 によると、障害のある方と関わったことのある人の方が、障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方のような。

表 19 身体障害をもつ人との関わりと障害に関する情報への積極性のクロス集計表

	障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か			計 (度数)
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
あり	52.2	35.5	12.4	100.0 (186)
なし	28.2	44.0	27.8	100.0 (518)
計	34.5	41.8	23.7	100.0 (704)

表 20 は、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがあるか」と「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か」をクロス集計したものである。これによると、ボランティアの経験のある人の方が、障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方だといえる。

表 20 ボランティア経験と障害に関する情報への積極性のクロス集計表

	障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か			計 (度数)
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
あり	66.7	25.4	7.9	100.0 (63)
なし	31.4	43.6	25.0	100.0 (637)
計	34.6	42.0	23.4	100.0 (700)

表 21 は、「障害に関する授業や講演を受けたことがあるか」と「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か」のクロス集計表である。これによると、障害に関する授業や講演を受けたことがある人の方が、障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方であるとわかる。

表 21 講演受講経験と障害に関する情報への積極性のクロス集計表

	障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か			計 (度数)
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
あり	54.8	31.3	13.9	100.0 (166)
なし	28.6	44.8	26.6	100.0 (542)
計	34.7	41.7	23.6	100.0 (708)

表 22 では、回答者の性別と「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か」をクロス集計した。この表によると、男性はあまり見聞きしていなくて、女性の方が見聞きしていることがわかる。

表 22 性別と障害に関する情報への積極性のクロス集計表

	障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か			計 (度数)
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	
男性	23.9	47.8	28.3	100.0 (293)
女性	42.3	37.6	20.1	100.0 (418)
計	34.7	41.7	23.5	100.0 (711)

以上の他に、「障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする方か」と回答者の年齢、学歴、収入ともそれぞれクロス集計したが、強い相関は見られなかった。よって、障害に関する記事や放送を積極的に見聞きする人は、障害のある方と関わったことのある人、障害のある人のためのボランティアの経験のある人、障害に関する授業や講演を受けたことがある人、女性であるといえるだろう。

## 6 自分が障害のある子どもの親になったとしても十分うまくやっていけると思う人

「自分が障害のある子どもの親になったとしても、十分うまくやっていけると思うか」という質問をしたところ、表 23 のような結果を得られた。私の予想では、障害のある人との関わり、障害のある人のためのボランティアの経験、障害に関する授業や講演を受けたことがあるかが、この結果と関連があるのではないかと思う。

表 23 自分が障害のある子どもの親になったとしても、十分うまくやっていけると思う

	度数	%
そう思う/どちらかといえばそう思う	135	19.0
どちらともいえない	382	53.8
そう思わない/どちらかといえばそう思わない	193	27.2
合計(有効ケース)	710	100.0

表 24 は、「身体障害者の方と関わったことがあるか」と「障害のある子どもの親になったとしても十分うまくやっていけると思うか」をクロス集計したものである。精神障害のある方、知的障害のある方との関わりの有無とのクロス集計表も同じような結果であった。表 24 によると、障害のある方との関わりのない人は、「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答した人よりも「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答した人の方が多い。障害のある人と関わったことのある人はその逆である。しかし、「どちらともいえない」と回答した人の割合は、障害のある人と関わったことのある人の方がいない人よりも多い。これは、障害のある人と関わったからこそその結果なのだろうか。

表 24 身体障害をもつ人との関わりと障害のある子どもの親になったとしても十分うまくやっていけると思うのクロス集計表

自分が障害のある子どもの親になったとしても、十分うまくやっていけると思う				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	23.9	59.8	16.3	100.0 (184)
なし	17.0	52.0	30.9	100.0 (517)
計	18.8	54.1	27.1	100.0 (701)

表 25 は、「障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがあるか」と「障害のある子どもの親になったとしても十分うまくやっていけると思うか」のクロス集計表である。この表は、表 24 ととても似ている。ボランティアの経験のある人の方が「そう思う/どちらかといえばそう思う」と回答し、経験のない人の方が「そう思わない/どちらかといえばそう思わない」と回答している。そして、「どちらともいえない」と回答した人の割合はボランティアの経験のある人の方が多い。

表 25 ボランティア経験と障害のある子どもの親になっても十分うまくやっていると  
 思うのクロス集計表

自分が障害のある子どもの親になっても、十分うまくやっていると 思う				
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	計 (度数)
あり	27.0	60.3	12.7	100.0 (63)
なし	17.9	53.3	28.8	100.0 (636)
計	18.7	53.9	27.3	100.0 (699)

以上の他に、回答者の性別、年齢、学歴、収入、障害に関する授業や講演を受けたことがあるかとそれぞれクロス集計したが、あまり関連は見られなかった。よって、障害のある子どもの親になっても十分うまくやっているとすることができる人は、障害のある方と関わったことのある人と障害のある人のためのボランティア活動に参加したこの人だといえる。

## 7 おわりに

障害のある方と関わりたいとか、障害のある人や障害について知りたいとか、障害のある方とうまく付き合えると思っている人は、障害のある方と関わったことのある人、障害に関する授業や講演を受けたことがある人、最終学歴が高めな人、障害のある人のためのボランティア活動に参加したことがある人、そして女性に多いことがわかった。確かに、障害のある人と関わる仕事をしている人は女性が多いイメージがある。

健常者と障害のある人がうまく付き合っていくためには、健常者が障害についてよく知ることが大切なのだと思う。そして、まずは障害のある人と関わってみることが重要なだろう。